

李白の旅

一 西域横断

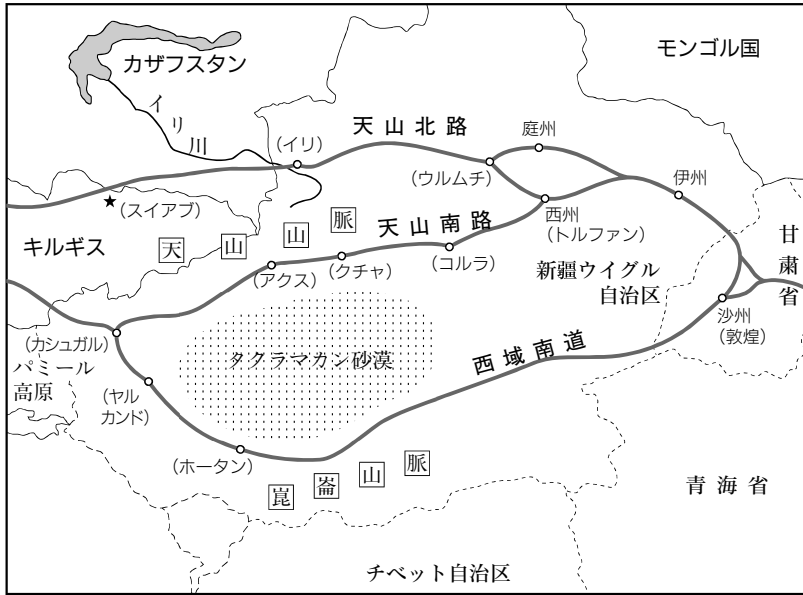
李白の生涯における足跡を線でつなぐのはいへん難しい。したがって、その「線」に外ならない彼の旅をたどっていくのも易しいことではない。生涯にわたりおよそ旅をし続けた彼の詩には、確かに訪れた土地のながしかを詠み込み、またその土地に住む人々に向けてうたわれたものが、恐らく相対的に杜甫よりは少ないとはいえ、相当数残されているのであるが、そうした中国各地に残された言わば「点」を時間に沿ってつなげるのがなかなか難しいのである。これまで、多くの先人が詩文を含む伝記資料に基づきながら李白の年譜を編んできているものの、杜甫などのそれと比べ、編者によってかなりの違いが生じているのは、まさにそのことを示している。

李白はその出生からすでに諸説があった。ただ、生まれて間もなく、もしくは生まれる少し前に、一家が西域から蜀の

地に移ってきたことは、『旧唐書』本伝以外の伝記資料がおよそ一致して伝えるところである。そこで、李白の旅を見ていくにあたり、はじめに李氏一家が西域の地から蜀へと至る道のりをたどっていききたい。もつとも、一言で西域の地とはいえ、李陽冰「草堂集序」には「条枝」とあり、范伝正「新墓碑」には「碎葉」とあり、前者であれば、現在のアフガニスタン共和国ガズニあたりに比定され、また後者であれば、現在のキルギス共和国トクマク付近にあったスイアブに比定されるように、随分と異なるところもある。ただ、条枝説については、特定の土地ではなく、広く西域の称として理解したり、スイアブに近接する土地に比定する見方もあり、碎葉とする説がやや有力なようであるから、ここでは、スイアブを出発の地として蜀に至るまでの道のりを見ていくことにしよう。

絹の道

スイアブは、新疆ウイグル自治区からパミール高原北まで東西およそ二五〇〇キロメートルにわたって横たわる天山山脈西部の北麓に位置したオアシス都市である。交易の拠点として



東西を往来する多くの商人の住む町であった。かの玄奘三蔵が仏典を求めてインドを訪れた旅の往路に立ち寄った地としても知られ、その見聞に基づいて編纂された『大唐西域記』巻一には、「窣利」地方の町のひとつとして、「諸国の商胡が雑居しており、土地はキビ、ムギ、ブドウに適していて、木立はまばらで、風が冷たく、人々は氈（細毛の織物）や褐（粗い毛織物）を身に付けている」と述べられている。「商胡」とは、商業に従事する胡人と言うが、玄奘の認識におけるこの町を含む「窣利」とは、即ちウズベキスタンのサマルカンド一帯のソグダイアナ地方の音訳であれば、その多くを占めていたのはシルクロードの隊商の民として活躍したソグド人であっただろう。スィアブはシルクロードの一区間である天山山脈の北麓に沿ってはしる天山北路の上にあった。

シルクロードは、ユーラシア大陸を東西に結ぶ巨大な交易路である。陸路のみならず、中国南方から東シナ海に出、南シナ海、インド洋を経てインドを経由し、さらにアラビア半島に至る「海の道」もあり、陸路も、中国を北上し、モンゴルやカザフスタンのステップ地帯を渡り、黒海へと至る「草原の道」があり、そして、オアシス都市を渡りながら、古来広く西域と呼ばれた現在の新疆ウイグル自治区一帯を横断し、パミール高原、ないしサマルカンドへと至る「オアシスの道」があった。一般に中国側からの交易品として絹が重視されていたことか

ら、一九世紀ドイツの地理学者リヒトホーフエンによって名付けられた「シルクロード（絹の道）」は、この「オアシスの道」をさす。オアシスの道にはさらに大きく三つのルートがあった。新疆ウイグル自治区の南部、タリム盆地の中央をおおうように広がるタクラマカン砂漠の南縁を通る西域南道、タクラマカンの北にそびえる天山山脈の南麓、砂漠の北縁を通る西域北道（天山南路）、そして、天山山脈北麓を通る天山北路である。

なお、天山南路と北路を併せて西域北道とする言い方もある。

玄奘は、長安を発った後、甘肅、青海二省に跨がる祁連山脈の南麓を通るいわゆる河西回廊を経、現在の新疆ウイグル自治区吐魯蕃市あたりにあつた高昌国を訪れ、天山南路を経由し、ペデル峠を越えてスイアブに至つたのであつた。東から至つた玄奘とは反対に、これから東へと向かう李白一家は、恐らくは南に天山山脈を望みながら天山北路を通つて中国を目指しただろう。北路は天山を源流とする大河イリ川が一带をうるおし、草原地帯も多く、どちらにせよタクラマカンの砂漠地帯を横断する西域南北道に比べ、水や食料の調達が相対的に容易であつた。

一家は天山北路を東行し、まずは北庭都護府が設けられていた庭州（新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州）に向かつてであらう。『通典』、『太平寰宇記』に従えば、スイアブから庭州までは「三千六百八十里」とあり、唐代の「里」を、四四〇メートル

ル／里として換算すれば、およそ一六〇〇キロメートルの長路になる。その間、具体的にどのような旅をしたのかはわからない。当時唐王朝は天山北路一帯に対し、庭州に都護府を設け、王朝への帰属を強いる一方で、諸部族の文化や風俗を尊重するという、緩やかな支配下に置く「羈縻」と呼ばれる統治体制を布いていた。南路を経由した玄奘が当時あつた様々な諸国を訪れたことは、『大唐西域記』や、玄奘の没後、彼の弟子たちによつて編まれた伝記『大慈恩寺三藏法師伝』からうかがえるが、そうした諸部族が割拠する国々を経由しながら東に向かつたのだろう。

玉門関

庭州からボグド山脈を挟んでその南側には西州があり、そこには安西都護府が置かれていた。この二つの州は唐代に三五〇余り置かれた正州であり、いわゆる貞観十道の西端である隴右道の中でも最も西に位置していたから、このあたりが当時の唐王朝による、少なくとも制度上から見た版図の西端と考えると良いだろう。庭州を経て、一家はさらに伊州に向かつてはたらずである。『元和郡県志』によれば、その間、九七〇里。伊州は、隋末の混乱以来、王朝の統治は及んでいなかったが、太宗の貞観四年（六三〇）に唐に帰属し、州が置かれた。州が置かれる前の伊吾国に玄奘が訪れたときには、当地に住んでいた中国僧と